
土地分類基本調査

冠山・横山

5万分の1

国 土 調 査

福 井 県

昭和63年

序 文

この土地分類調査は、地形、表層地質、土壌および土地利用の現況を科学的かつ総合的に調査し、土地の基本的性格を明らかにすることを目的とし国土調査法に基づき実施するものです。

本県では、56年度から調査を実施しており、今回は、「冠山・横山」図幅についてとりまとめました。

今後、この成果が各種土地利用計画の策定や土地開発保全事業の基礎資料として、あるいはその他広く関係者に利用され、県土の有効利用の一助となれば幸いに存じます。

最後に、調査の実施にあたり御協力いただいた関係各位に対して心から謝意を表する次第であります。

昭和63年3月

福井県県民生活部長 松 本 齊

まえがき

1. 本調査の事業主体は福井県であり、国土庁土地局国土調査課の指導を得て実施したものである。
2. 本調査の成果は、国土調査法施行令第2条第1項第4号の2の規定による土地分類基本調査図および土地分類基本調査簿である。
3. 調査の実施、成果の作成機関および担当者は下記のとおりである。

総括	福井県県民生活部地域振興課		
調査	福井県土地分類基本調査研究会	会長	塚野善蔵 (福井大学名誉教授)
地形調査 (傾斜区分)	仁愛女子高等学校	教諭	吉川博輔
表層地質調査	福井大学教育学部	教授	三浦 静
	〃	助教授	服部 勇
土壌調査	福井県農業試験場	課長	小林 勤
	〃	研究員	野村豪一
	福井県総合グリーンセンター	技師	川端秀治
土地利用現況調査	福井県地域振興課		

目 次

総 論

I 位置・行政区画・人口	1
II 地域の概況	4
III 主要産業の概要	6
IV 交 通	12

各 論

I 地形分類図	13
II 表層地質図	20
III 土 壌 図	27
IV 土地利用現況図	35

總論

I 位置・行政区画・人口

1. 位置

「冠山，横山」図幅は，岐阜県との県境に位置し，東経 $136^{\circ}15' \sim 136^{\circ}30'$ ，北緯 $35^{\circ}30' \sim 35^{\circ}50'$ の範囲にある。

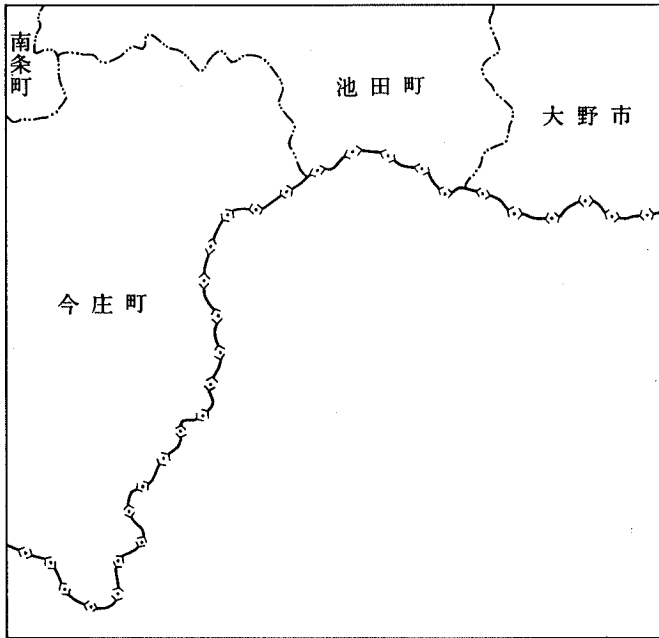
図幅面積は，約 837 km^2 であり，そのうち福井県陸地面積は約 214 km^2 である。

2. 行政区画

本図幅に含まれる県内の行政区画は，図1のとおりで，池田町の南部分，今庄町の東部分，さらに南条町，大野市の一部分から成っている。

なお，市村町別の総面積との関係は表1のとおりである。

図1 行政区画



3. 人 口

本図幅にかかる行政区域全体の人口および世帯数の推移は、表2に示すとおりである。

人口についてみると、福井県人口が約3%増加しているのに対し、当該市町村は、減少傾向にある。大野市、南条町の人口は、昭和55年から60年にかけては増加しているが、池田町、今庄町の人口は、昭和55年から60年の減少率は、50年から55年に比べると縮小しているが、4.4%、2.6%と減少している。地域計としては、0.2%の減少となった。

世帯数は、池田町がわずかに減少している他は、増加している。

表1 図幅内市町村別面積

(単位: km^2 , %)

区 分 市 町	図 幅 内 面 積		総 面 積 (B)	占 有 率 (A/B)
	実 数 (A)	構 成 比		
大 野 市	4 3.01	20.1	5 4 1.66	7.9
池 田 町	4 8.06	22.4	1 9 4.77	24.7
南 条 町	5.67	2.6	5 3.46	10.6
今 庄 町	1 1 7.84	54.9	2 4 1.67	48.8
地 域 計	2 1 4.58	100	1,03 1.56	

資料：「全国都道府県市区町村別面積調（昭和61年）」（建設省国土地理院）

注：図幅内面積は、国土地理院発行5万分の1地形図から計測

表2 人口および世帯数

(単位：人，戸，%)

区分	昭和50年		昭和55年		昭和60年		人口増加率	
	人口	世帯数	人口	世帯数	人口	世帯数	55年/50年	60年/55年
大野市	41,918	10,306	41,901	10,476	41,926	10,485	△0.04	0.05
池田町	4,814	1,236	4,510	1,190	4,318	1,166	△ 6.7	△ 4.4
南条町	5,418	1,191	5,411	1,254	5,595	1,287	△ 0.1	3.4
今庄町	6,213	1,527	5,859	1,484	5,711	1,510	△ 6.0	△ 2.6
地域計	58,363	14,260	57,681	14,404	57,550	14,448	△ 1.1	0.2
県計	773,599	198,933	794,354	212,744	817,633	224,295	2.6	2.9

資料：国勢調査

注：△は減少

Ⅱ 地域の概況

1. 概況

本地域は、地形的にみると越美山地と越前中央山地に区分される。

越前中央山地の南限は、銀杏峯、笹生、金草、武生の各断層谷で、越美山地と境している。

越美山地の南西部の県境の山地は、福井県側に対しては急斜面で、池田町の南部金草岳北斜面は、一種の鍋状陥没を示す地形をなしており、足羽川の各支流の水をこの盆地に集めて北流している。その清流は、岩をかんで溪谷をなし、風光明媚な景色をつくりだしている。

また、今庄町を北流する日野川が、岐阜県境の笹ヶ峰に源を発し、今庄で鹿蒜川と合流している。

今庄町と岐阜県との境には、夜叉ヶ池がある。昭和53年の映画化で全国にその名が知られるようになった夜叉ヶ池は、郵政省が近年行った北陸百景の中でも人気投票の一位にあげられている。その他にもこの地域には、平家平、連如聖人遺跡、伊藤氏庭園、など数多くの未開発の観光地がある。

2. 気象

本地域は、ほぼ北陸型の気候を示しており、夏は暑く冬は寒い、またこの地域は、県内でも有数の豪雪地帯として知られており、最深積雪は、3 mから4 mもある。

表3 気 象 表

(単位 : °C, mm, cm, m/s)

月 区分	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	全 年	統計期間
	平均気温	1.7	2.0	5.2	11.6	16.0	20.6	25.1	26.2	21.8	15.3	9.8	4.7	
平 最 高 気 温	4.9	5.7	9.9	17.3	22.4	25.4	29.7	31.4	26.4	20.3	14.8	8.3	180	
平 最 低 気 温	-1.6	-1.8	0.4	5.8	10.8	15.7	20.4	21.0	17.2	10.3	4.8	1.0	8.7	
降 水 量	392	250	189	144	150	243	279	170	248	205	215	386	2,871	
最 深 積 雪	335	440	318	142							9	258	440	1909~1970

資料 : 「福井県の気候 (昭和51年) 」 (福井地方気象台)

観測所名 : 今庄 (南条郡今庄町 今庄 114 - 13)

注 : 平均気温は、平均最高気温と平均最低気温の平均である。

Ⅲ 主要産業の概要

1. 就業構造

本図幅にかかる行政区域全体の就業構造は、表4のとおりである。

県平均と比較すると、農業、林業を中心とした第一次産業の比率が高く、第三次産業の比率は、県平均を下回っている。昭和55年から60年の推移をみると、第一次産業が減少し、第二次、第三次産業は、わずかに増加している。

2. 農林水産業の概要

農業の概要は表5のとおりである。本地域では水田が耕地の殆んどを占め、生産額でも米が86%（県平均83%）を占め、稲作中心の農業形態を示している。畜産生産額は、大野市で乳用牛の割合が高く、県生産額の約4分の1を占めている。しかし、「冠山、横山」図幅の地域では、農業はわずかである。

森林の概況は、表6のとおりである。森林の総面積は、本地域の面積の約87%を占めている。樹種別にみると、広葉樹林が多く、針葉樹林の約2倍になっている。また、この地域の人工林率は、県平均と比べてみても低く、県内でもおこなわれている地域である。

3. 商工業の概要

商業の概要は、表7のとおりで、本地域は商店数で見ると、小売業がそのほとんどを占めており、特に南条町、今庄町では小売業の比率が非常に高くなっている。全体的にこの地域は、商店数も少なく、年間販売額も県全体に対して占めている割合は、約2.7%である。

工業の概要は表8のとおりで、本地域は、事業所数が県全体に対して占めている割合は、約4.8%であり、他の地域と比べてみても非常に低い。

表4 産業別就業人口

区分	総数		第一次産業		第二次産業		第三次産業	
	昭和55年	60年	55年	60年	55年	60年	55年	60年
市町								
大野市	24,072 (100)	23,312 (100)	48,16 (20.0)	38,55 (16.5)	9,940 (41.3)	9,766 (41.9)	9,316 (38.7)	9,691 (41.6)
池田町	28,77 (100)	2,705 (100)	6,49 (22.5)	5,69 (21.0)	1,374 (47.8)	1,295 (47.9)	854 (29.7)	841 (31.1)
南条町	30,37 (100)	3,035 (100)	580 (19.1)	415 (13.7)	12,50 (41.2)	13,94 (45.9)	12,07 (39.7)	12,26 (40.4)
今庄町	33,04 (100)	3,190 (100)	605 (18.3)	493 (15.5)	13,08 (39.6)	13,66 (42.8)	13,91 (42.1)	13,31 (41.7)
地域計	33,290 (100)	3,224,2 (100)	6,650 (20.0)	5,332 (16.5)	13,872 (41.7)	13,821 (42.9)	12,768 (38.3)	13,089 (40.6)
県計	425,313 (100)	433,894 (100)	54,127 (12.7)	42,327 (9.8)	168,807 (39.7)	177,172 (40.8)	202,379 (47.6)	214,395 (49.4)

資料：総務庁統計局「国勢調査報告」

注：()内は構成比

分類不能の産業は、第三次産業に含めた。

表5 農業の概要

(単位：ha, 百万円)

区分	耕地面積			農業粗種								生産額									
	計	田	畑	耕				種				畜			産						
				計	米	麦	雑穀 豆 いも	野菜	果 実	その他	計	肉用牛	乳用牛	豚	鶏	その他					
市町																					
大野市	4,752	4,560	79	9	104	7,524	6,431	91	98	714	6	184	786	19	505	-	260	2			
池田町	540	510	29	1	-	617	536	7	24	34	2	14	20	16	2	-	2	-			
南条町	498	464	23	11	-	591	516	10	19	30	11	5	33	-	2	-	31	-			
今庄町	619	597	22	0	-	892	805	19	16	34	2	16	14	-	14	-	-	-			
地域計	6,407	6,131	153	21	104	9,624	8,288	127	157	812	21	219	853	35	523	-	293	2			
県計	48,400	44,000	3,360	725	297	74,753	62,242	1,307	1,583	7,327	832	1,462	8,653	878	2,294	1,115	4,310	56			

資料：農林水産省福井統計情報事務所，昭和60年

表6 森林の概況

(単位：ha, %, 千 m^3)

区分	総面積	国有林・民有林別		樹種別内訳					人工林率	蓄積量 (材積)
		国有林	民有林	針葉樹	広葉樹	竹林	無立木地 等			
大野市	45,077	13,832	31,245	12,084	28,497	7	4,489		30.5	3,653
池田町	17,883	2,274	15,609	7,382	9,984	2	515		42.6	2,044
南条町	4,081	342	3,739	1,800	2,181	4	96		42.6	367
今庄町	22,720	5,952	16,768	4,664	17,553	11	492		21.2	2,015
地域計	89,761	22,400	67,361	25,930	58,215	24	5,592		31.1	8,079
県計	315,079	40,608	274,471	135,702	166,349	1,561	11,467		42.1	31,688

資料：「福井県林業統計書」昭和61年度

表7 商業の概要

(単位:店,人,㎡,億円,万円/㎡)

区分	商 店 数				従業者数	売場面積	年間販売額	1㎡あたり年間販売額
	商 数		店 数					
	総数	卸売業	小売業	飲食店				
市 町								
大野市	901	101	567	233	3,160	46,765	516	95
池田町	91	6	53	32	212	3,773	28	14
南条町	70	1	50	19	306	2,905	45	84
今庄町	76	1	67	8	186	2,508	26	11
地域計	1,138	109	737	292	3,864	55,951	615	59
県 計	16,564	3,141	9,375	4,048	72,118	816,875	22,927	547

資料:昭和60年商業統計調査結果報告書

表8 工業の概要

(単位：件，人，㎡，万円，㎡)

区分	事業所数	従業者数	敷地面積	製造品 出荷額等	1日あたり 用水量
市町					
大野市	355	4,715	473,504	5,090,392	26,876
池田町	53	533	4,961	412,380	90
南条町	33	322	x	364,782	x
今庄町	34	589	33,866	576,441	843
地域計	475	6,159	512,331	6,443,995	27,809
県計	9,845	110,560	10,313,133	163,272,459	1,040,317

資料：福井県の工業（昭和60年）

注：敷地面積，1日あたり用水量は30人以上の事業所のデータである。

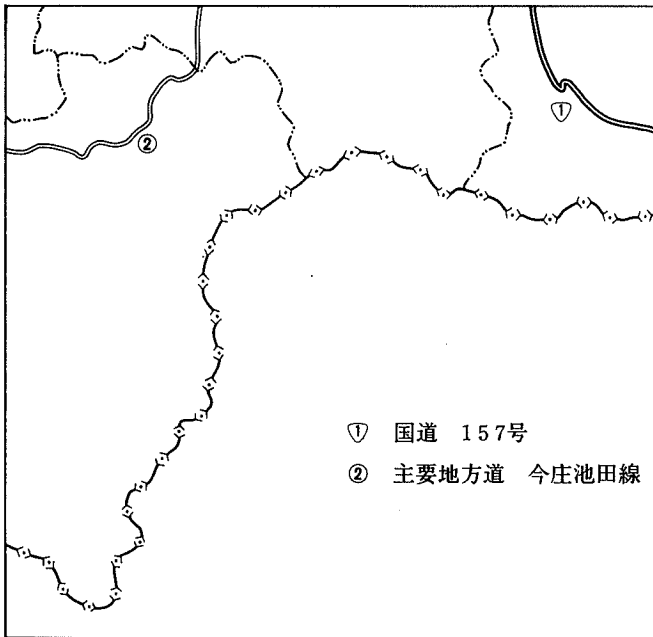
「x」は1または2の事業所に属する数を秘匿し，申告者の秘密を保持した箇所を示すものである。

Ⅳ 交 通

本地域は，大部分が山地で占められており，交通は発達していない。

地域内には，金沢市から大野市を経て岐阜市に至る国道 157 号および今庄町から池田町に至る主要地方道今庄池田線の 2 本の主要な道路が走っている。

図 2 主 要 交 通 網



各 論

I 地形分類図

1. 地形概説

本図幅は福井県嶺北地域の南西部にあたり、南条山地と越美山地からなる。

南条山地は、越美山地の北西部に位置しその境界は金草断層で境され、両者の高度差は約 600 m におよんでいる。標高約 700 m の定高性を示すこの山地の中を日野川本支流が複雑に侵食している。

嶺北の南部から岐阜県にまたがる越美山地は、標高 1,100 m 付近に平坦面が分布している。この面から高くそびえる冠山 (1,257 m) ・金草岳 (1,227 m) ・三国岳 (1,209 m) などはいずれも選択侵食による残丘である。この越美山地には比較的規模の大きい断層があり、方向も北西-南東、東西、北東-南西など多様であるが、中でも雲川-根尾谷を結ぶ温見-根尾谷断層はもっとも有名である。

低地は、田倉川や温見川などに幅の狭い谷底低地が見られる程度である。ただところどころに扇状地や崖錐が小規模に見られる。

2. 地形各論

(1) 山地

山地の分類は、次の基準に従って分類した。

地形の分類		定 義
大分類	小分類	
山地・火山・丘陵地	山頂緩斜面	山地・火山地・丘陵地の山頂部や尾根部で表面傾斜が15度未満の緩斜面、平坦面または小起伏面
	山腹・山麓緩斜面	山地・火山地・丘陵地の中腹もしくは山麓部にあつて、表面傾斜が15度未満の緩やかな斜面
	一般斜面	山地・火山地・丘陵地に普遍的に発達する斜面で、表面傾斜 15～30度の斜面
	急斜面	山地・火山地・丘陵地の表面傾斜が30度以上の急斜面または崖

急斜面（傾斜30度）の占める面積は、この図幅の約70%に達していることから、ここに見られる山地は地形上険しいことが分かる。また、一般斜面（傾斜15～30度）は図幅の20%を占めている。一方、起伏量からみてもこの図幅内の山地は、6～7（400～800 m）と比較的大きく壮年期の険しい山地の様相を呈している。山頂緩斜面は、標高1,000 m付近と、標高500～700 m付近にそれぞれ分布している。この緩斜面のうち1,000 m級の平坦面は、一次輪廻においてかなり削剝作用を受けていたことを物語る。ただし、倉の又山（1,216 m）に見られる顕著な緩斜面は削剝面でなく、大規模な地送り面である。

ところで、この図幅の大部分を占める越美山地には、東西方向の断層をはじめ、種々の走行の断層が発達し、現地形との直接関係の有無にかかわらず山地を小山塊に分断している。この図幅内に見られる主な断層は、温見断層（一部分である熊河～温見峠間）と金草断層である。

ア. 温見断層

温見断層は、池田町野尻付近から南東へ、美濃俣・熊河・温見を経て温見峠付近までの約20kmを言う。この断層は、熊河集落北側の半島状の稜線とその西側にある熊河谷の流路の屈曲状態や温見谷の両側の地質（中生代花崗岩類など）上のずれ（約3 km左ずれ）などから左ずれの断層である。またこの断層は、1891年（明治24）の濃美地震のとき活動しており活断層である。

大森房吉は、当時これを測定し、温見断層の両側の山塊が、濃郷白山の隆起、姥ヶ岳の相対的沈降、部子山塊の隆起、冠山塊の相対的沈降を予測した。

一方松田時彦は、濃美地震と既存の活断層との関係を知るために、当時の地震変位の位置を詳しく調べ地震断層の再検討を行なっている（1967～1968年）。これによると、少なくとも野尻～温見間は既存断層線に沿って連続して地震変位が生じたものと考えられる。このことを図幅内の温見断層の部分について地震変位を見てみると、地震断層線は、熊河（現在廃村、現地形図では集落名消去）集落の中央部N50度Wの走向で走り、その南東端は村の社に達していた。また断層線の北東側が陥落し横切りもあった。変位線は更に南東へ温見谷の中を走り温見集落（現在廃村、現地形図では集落名消去）より約654 mおよび1,962 m手前のところで温見川を二度横切り温見集落に達した。そこでは高原でも河原でもほぼ一

直線にN50度Wの走行で走り、それに沿って隆起したり陥落したりした。陥落は常に断層線の東北側であり左ずれに変位した。

以上のごとく温見断層は活断層であり、したがって温見河谷の開発は慎重を要する。

イ. 金草断層

金草断層は、地形学的に見て活断層とされている断層である。断層の位置については学者によって若干違いはあるものの芋ヶ平から多留美川の上流にかけては、各学者とも一致した線上に想定している。一方地質学の分野においても、芋ヶ平北東から高倉および多留美川の上流にかけては確認断層とされており、地形学分野とほぼ同様の位置に断層が引かれている。しかし、活動時期・断層の変位・断層の長さや規模について未説明が残されている。

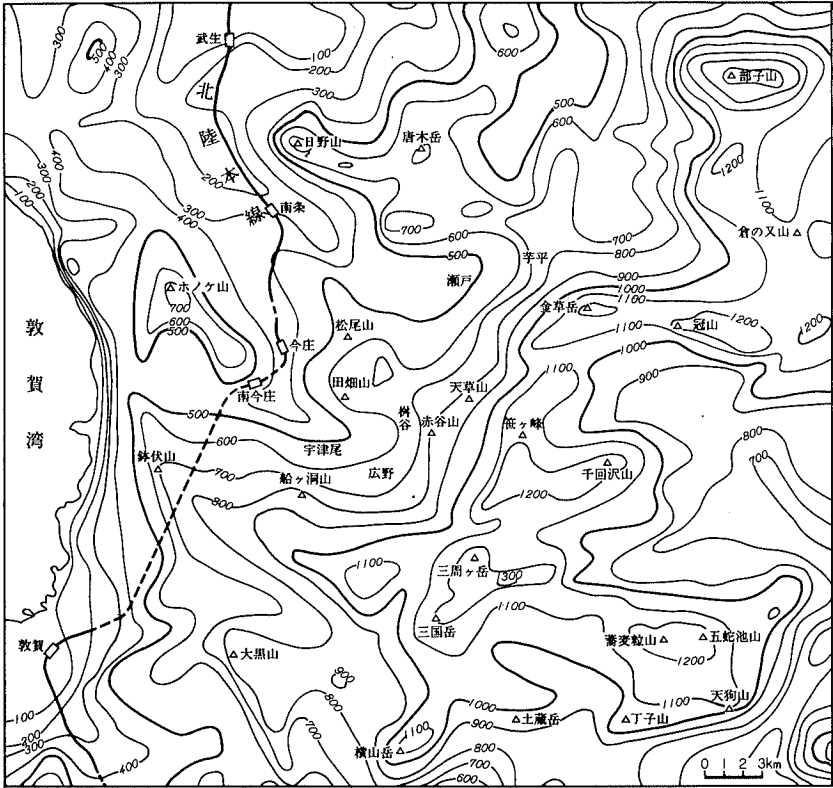
すなわち、活動時期については地形学的には比較的明瞭な断層地形が見られるため活断層とされているが、具体的な活動年代については触れられていない。ただ、岡山俊雄(1931)は美濃越前山地の地形発達史を考え、この断層は撓曲崖の形成時に形成され、第四紀後半と解釈される第7期の沈降期(根尾川や揖斐川沿いの段丘形成以降)にも運動が行なわれたと考えられている。また、活断層研究会(1980)が「日本の活断層」において、この断層を確実度1・活動度Bクラス(0.075~0.5 m/1,000年)としている程度である。一方地質学的研究においても、調査地に第四紀層がほとんど分布していないこともあり、金草断層の形成時期については触れられていない。

また断層変位については、地形学では右ずれ変位としているのに対し、地質学的研究では左ずれ変位として表現されている。この変位の解釈の違いについては、この断層が第三紀以前より活動していた断層で、第三紀以前は左ずれの変位を示し、第四紀になって右ずれの変位へと変化した断層であるためと推定されている。

断層の長さや規模であるが、地形学的研究では約6 km~16 kmと研究者により異なるが、芋ヶ平北東から多留美川上流にかけては各研究者ともほぼ同位置に想定しており、その長さは約8~11 kmである。地質学的研究では、西田(1962)が芋ヶ平北東から高谷ヶ池付近までの約11 km、服部・吉村(1979)が足羽川支流の割谷川から高倉川までの約11.5 kmを確認または推定している。

図1 接峰面図

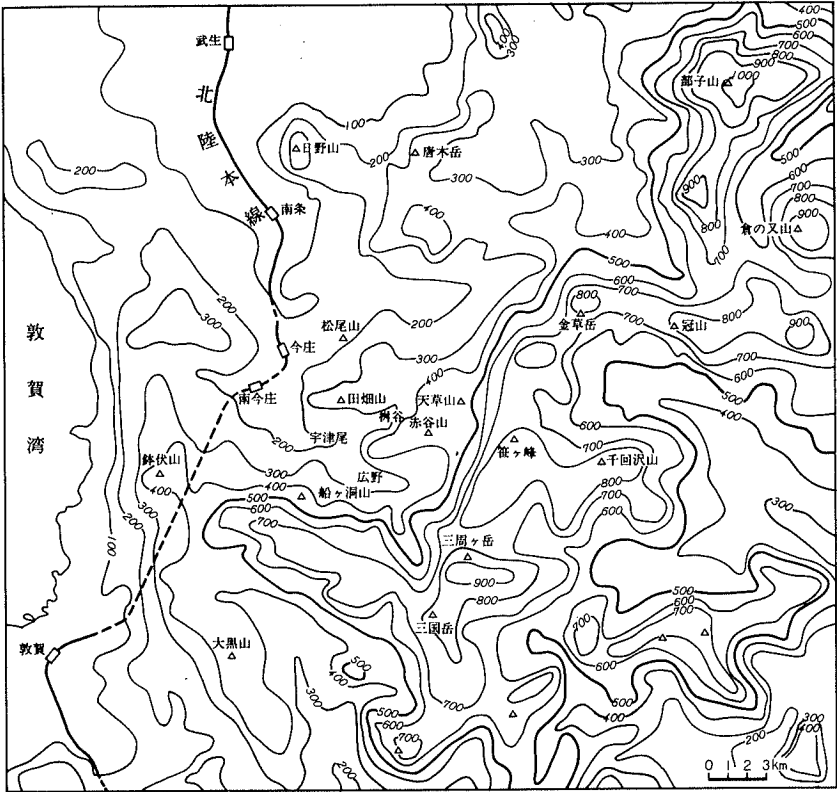
(2 kmメッシュ)



図中の数字は標高(m)を示す。

図2 接谷面図

(1 kmメッシュ)



図中の数字は標高(m)を示す。

以上のように金草岳断層は、地形学的研究により活断層と認定され地質学的研究により実在する断層であるとされているが、その活動時期や変位など今後の研究が待たれる。ただ榎谷川ダム建設のための地質調査報告書（北陸農政局日野川用水農業水利事業所1986）によると、この断層の最終活動時期は、約20万年以前（-23万年～41万年）で、長さは8 km程度でその南西端は高倉川上流部で消滅すると記述されている。

次に、この図幅を中心とした地域の接峰面と接谷面から見た山地地形の特徴は、次の通りである。

① 金草岳から笹ヶ峰にかけて、北東-南西の方向に連続する明瞭な急傾斜面（等高線が密になっている部分）が見られるが、これを境に、南東側は標高1,200 m付近に、北西側は標高700 m付近にそれぞれ定高性のある山地となっている。

② 部子山-冠山-金草岳-三国岳を結ぶ標高1,200 m以上の主山陵は、北東-南西方向を示すが、揖斐川の最上流に沿って伸びる標高1,000 m以下の谷地形は、北西-南東方向を示す。

③ 日野川に沿って南-北から北北西-南南東方向に、標高500 m以下の低地が入り込んでいる。

④ 標高1,200 mの山陵と標高700 mの山地の間には、北東-南西方向に直線的に連続する急斜面が分布する。

以上のことから、標高1,000 mと700 m付近はかつて平坦面（準平原）が広がっていたと考えられる。その後河川による侵食作用によって急斜面と深い谷ができ、1,200 mと700 m付近にわずかながら平坦面が残されたものと解される。また上述の急斜面には、金草断層と笹ヶ峰断層が北東-南西方向に走っている。

(2) 段丘

段丘は、田倉川流域の瀬戸、日野川上流の広野、熊河川の熊河にそれぞれ小規模に分布している。これらの段丘は、直径10～50 cmの円礫または垂円礫を含む砂質土よりなり、比較的締まりは良い。礫は堅硬もしくは緻密であり、くさり礫は認められない。現河床との比高は、平均3～4 m程度で、最大10 mほどである。いずれも低位段丘である。

(3) 扇状地・崖錐

田倉川や温見川の河谷に小規模な扇状地または崖錐が分布する。田倉川流域の古木付近の緩斜面は扇状地であるが、残りの緩斜面は崖錐である。

特に温見川右岸に見られる崖錐は、主として花崗岩礫と粘土・砂質性土壤が混ざった物質で構成されており、典型的な崖錐地形である。礫径は、最大3～4 m・最小10～15 cmで、平均30～40 cmである。礫のほとんどは、角礫である。この崖錐の末端部は、温見川の氾濫時に侵食され形成された小崖（比高2～3 m）が見られる。

(4) 谷底低地

河谷に幅の狭い谷底低地が見られる。この低地は河川の堆積作用によって形成されたもので、礫・砂・泥などが混ざりあって堆積した地形である。特に田倉川流域の上温谷－小倉谷にかけて旧河床が見られることから、かつてこの付近では河川がよく氾濫したものと解される。田倉川や榊谷川の上流部には一部段丘化した地形が見られるが、堆積状態・堆積物質などから判断してここでは谷底低地とした。

Ⅱ 表層地質図

はじめに

冠山・横山図幅の地質は大局的には西隣の今庄・竹波図幅地域の地質とほぼ同様である。すなわち、中生代の砂岩・頁岩，チャート及びオリストストロームと呼ばれる海底地滑り性堆積物が大部分を占め，これらを被覆して，新生代の安山岩が図幅地域の北東部の高所に分布する。最東部の温見川の上流に中生代末の花崗閃緑岩がわずかに露出している。第四紀の堆積物は宅良川と温見川に沿って狭長に分布している。この地域には古生代の堆積物が存在するが，それらはすべて中生代堆積物の中に巨礫として含まれており，正確な意味での古生層は分布していない。この地域には3本の大断層が走り，それらによって地形のみならず地質構造も影響されている。

この地域における主要な地層の層序を第1表に示す。

第1表 冠山地域の地質層序表

新生代	第四紀	沖積世	現河床堆積物	
		洪積世	温見近辺の段丘堆積物	
	第三紀	中新世	安山岩類	
中世代	白亜紀		能郷白山花崗閃緑岩類	
	ジュラ紀		東俣砂岩層	
			砂岩 頁岩	
三疊紀		チャート	オリ リス スト	
古生代	二疊紀 石炭紀	石灰岩 緑色岩		

A. 固結堆積物

A-1. 中生代堆積物

この地域の主要な地質である中生界には、今庄・竹波地域の図幅説明書に用いた分類と同じ分類が適用できる。すなわち、本地域でも砂岩・チャートを主体とする層相（地質図幅では ss および ss・ms と表示された部分）と頁岩を主体とするオリストストローム相（地質図幅では ms と表示された部分）に区分できる。その他に、図幅北西部に東俣層と呼ばれる砂岩相（地質図幅で ss₂ と表示された部分）の一部が分布している。以下、地質年代順に説明する。

A-1-a. オリストストローム相

本相は図幅地域内のほぼ北半分を東西に分布している。頁岩及び細粒砂岩が大部分を占め、その中に緑色岩（輝緑凝灰岩）や石灰岩が不規則に混在している。頁岩や砂岩は黒色を呈し、特に砂岩は、いわゆるグレイワッケに分類される岩石で、石英質である。砂岩には希に小さな頁岩のパッチが無数に含まれる場合もあるが、一般には黒色均質である。頁岩は著しく変形しており、よれよれのへき開が発達し、時には千枚岩質になっている。これらの碎屑岩はオリストストロームと呼ばれる地層であり、堆積岩特有の成層状態は全く見られず、地層面はほとんど特定できない。時には砂岩中に地層面が認められることもあるが、多くの場合その砂岩自体が大きなブロックであり、地層全体の構造とは一致しないと思われる。ブロックのサイズは、数センチ程度のものから、露頭のサイズをこえるものまで存在する。

本相中には異地性岩体として、緑色岩、石灰岩、およびチャートが含まれる。緑色岩は玄武岩質枕状溶岩と凝灰岩よりなり、一般には緑色あるいは赤褐色を呈し、パンペリー石、ブドウ石、及び沸石などの変成鉱物を含む。その外に、緑泥石、石英、方解石などの二次鉱物は普遍的に認められる。緑色岩中の初生鉱物として、単斜輝石と曹長石化した斜長石が存在する。能郷白山周辺の本層は中生代末の花崗岩質岩石の貫入により比較的高い変成作用を受けている。

緑色岩はオリストストローム相の分布範囲の南部に多く存在し、時にはかなり側方に連続し、現地性の火山岩のように判断される場合もあるが、基本的には異地性であり、しばしば、露頭の中でも巨礫状であることが確認される。

石灰岩は、やはり礫状であるが、サイズは緑色岩よりはるかに小さく、最も大きいもので、宅良の部落（現在は廃村）の北に露出する連如上人遺跡の石灰岩体で、長径が50m、幅が30mである。石灰岩塊は白色あるいは灰色で、均質なものは少なく、岩塊自体が石灰岩の粒の集合（石灰質礫岩あるいは石灰質砂岩）であることが多い。石灰岩には紡錘虫がしばしば含まれ、それらにより石灰岩の地質年代を定めることができる。現在判明しているところでは、二疊紀中期ないし後期のものが多いが、希に石炭紀中期のものも認められる。

本相中のチャートは地質図に記入するには小さ過ぎるが、その産状は異地性であることを示す。チャートの地質年代は今の所不明であるが、今庄図幅の資料を参考にすると、二疊紀と三疊紀に区分されると思われる。

本相の正確な堆積年代は、はっきりしないが、本相中に含まれる珪質頁岩から得られる最も若い放射虫は最前期ジュラ紀を示し、多分、本相はジュラ紀前半の堆積物であろう。すなわち、ジュラ紀前期に巨大な海底地滑りが繰り返し発生し後背地に露出していた石炭紀から三疊紀の地層が一緒に流れ込んだものであろう。現在の知見から判断すると、本相はジュラ紀の海溝のような環境に堆積したと思われる。このような堆積物の一般的特徴として、地層全体の内部構造がはっきりと特定できないことが挙げられ、そのため本相においても、その地質構造を明解に定義できない。今回の調査から、見掛けの厚さが約2,500mあり、北に数10°傾斜していると推定される。

A-1-b. 砂岩・チャート相

本相は砂岩・頁岩中に大小いろいろなサイズのチャートが分布している。砂岩は一般に中粒ないし粗粒砂岩であり、とくに粗粒砂岩は著しく長石質のアレナイトである。粗粒砂岩中にはしばしば巨礫岩が含まれ、冠山礫岩系と名付けられている。冠山礫岩系の全体の分布や構造ははっきりしないが、地質図にはその露出地点を黒丸で示してある。礫岩を構成するクラスト（礫）のサイズはときに長径が1mを越えることがあり、それらは、大部分が花崗岩質の優白岩である。コブルサイズのチャートも頻繁に含まれ、その中にはLength-slow chalc-edonyが脈としてあるいはマトリックス中に存在している。その他にコブルないしボールダーサイズの石灰岩角礫も希に含まれる。本礫岩は粗粒砂岩と一連の

堆積物であり、一種の海底扇状地を形成していたのであろう。そのため砂岩や頁岩のクラストが多量に含まれている。砂岩は頁岩と互層する場合も多く、タービダイトの様相を呈する。頁岩はあまり発達しないが、その大部分は黒色中粒の頁岩である。時々緑色の珪質頁岩や赤色ないし赤褐色の粗粒頁岩が分布する。

本相中のチャートはその産状から三種類に分類される。1つは側方に連続性の比較的より厚層チャートであり、冠山の頂上を形作っているチャートが典型的である。第2は砕積岩中にレンズ状に挟在するチャートであり、厚さもあまり厚くない。このタイプのもは福井・岐阜県境の両側に分布する。第3のチャートは冠山の中腹と藤倉谷に露出するもので、大変厚層であるが、あまり連続性がなく、その分布形状も不規則である。チャートの地質年代を放散虫化石により決めると、第1のものは三疊紀であり、第2のものは三疊紀ないしジュラ紀である。第3のチャートは化石を含まず、時代不明である。

チャートの色は一般に白色のものが多い。赤色あるいは緑色のものは第2のチャートに存在し、黒色ないし灰色のチャートは第一のものに多い。

本相の地質時代は珪質頁岩やマンガンノジュールに含まれる放散虫に基いて決まることができる。マンガンノジュールから得られる放散虫はジュラ紀中期の前半を示し、珪質頁岩から得られる放散虫は中期ジュラ紀後半を示す。砂岩・礫岩はこの年代よりも新らしく、多分、ジュラ紀後期から白亜紀最前期の堆積物であろう。この年代を参考にすると、結局は、この砂岩・チャート相は三疊紀からジュラ紀末までの堆積物が複雑に積重り、さらにその中に時代のはっきりしない第3のチャートが不規則に入込んでいることになる。本相の見掛けの厚さは数千mに達する。

A-1-c. 東侯層

東侯層は冠山図幅内では、北西部の段ノ岳付近にわずかに分布するにすぎない。本層は大野図幅内に比較的広く露出し、そこにおける観察結果も参考にして記述する。東侯層は砂岩卓越相で、頁岩をほとんど含まない。そのため、全体に塊状で、中粒ないし粗粒の石英・長石質砂岩より成る。白色ないし灰緑色を呈する。本層の地質時代は不明である。見かけ上、全体の厚さは2,000 m位と見積られるが、冠山図幅内では、下部の数100 m程度が分布するに過ぎない。

B. 深成岩

1. 白亜紀花崗閃緑岩類

冠山図幅の最東部の温見川の上流部に狭く露出する花崗閃緑岩は根尾図幅において広く分布する能郷白山花崗岩体の一部である。冠山図幅内では、優白色の部分（花崗岩質）とやや緑色を示す部分（花崗閃緑岩質）とがある。本岩は白亜紀末期の、いわゆる新期花崗岩に属する。

C. 火山岩

1. 第三紀安山岩類

本図幅北東部の標高 600 m より高所に広く安山岩類が分布している。本岩類は大部分が溶岩質安山岩であり、しばしば凝灰角礫岩も存在する。赤色、緑色あるいは黒色を呈する。本岩は化石を産しないため地質時代ははっきりしないが、広域的対比から新第三紀中新世と思われる。

D. 未固結堆積岩

4. 第四紀堆積物

冠山図幅は大部分が山岳地域で占められており、第四紀の堆積物は温見川・足羽川・宅良（田倉）川などの現河床に沿ってわずかに分布するに過ぎない。例外的に、大野市温見の温見川沿いの両岸には、緩斜地が分布している。これを構成するのは土石流ないし扇状地性の礫層であり、巨礫サイズのものから小礫サイズの花崗閃緑岩礫を多く含み、厚さが 10—5 m である。まれに薄い砂層をレンズ状に挟むが、一般には雑多な堆積状態を示している。地形・土壌などの特徴から見て、後期更新世のものと推定できる。

E. 地質構造

冠山図幅内の重要な地質構造として、中生代堆積物に関係する構造と、第四紀の活断層があげられる。中世代堆積物の地質構造は極めて複雑であり、今回の調査からもしっかりさせることはできなかった。いえることは、オリストストローム相も砂岩・チャート相も異なる時代の地層が順不同に積重なっていたり、混在

していたりしているとだけある。オリストストローム相とチャート・砂岩相との関係も判然としないが、前者が後者の構造的上位にある可能性が高い。東俣層はさらにオリストストローム相の構造的上位に位置しているが、その関係が断層なのか不整合なのかは不明である。これら3つの層相は全体として北に凸の背斜構造をなしているが、その両翼部に第四紀の活断層が走っている。

本図幅内には3つの主要な活断層が発達している。図幅西部の高蔵を通して金草岳断層が、笹が峰の西麓を通して笹が峰断層が東北東—西南西にのびている。これら2つの断層は数10万年前まで活動した横ずれの断層であるが、現在は休止していると思われる。一方、図幅東北部には、根尾谷断層系に属する温見断層が北西—南東に延びている。温見断層は温見川に沿って池田町野尻まで追跡できる。この断層は1891年の濃尾大地震の際、実際に左ずれの変位を示す活動をした。これら3つの活断層は地形的にも明瞭で、その変位量は総計数kmに及ぶと推定される。この図幅内の堆積岩は断層近くではしばしば激しく変形を受けている。

参 考 文 献

- 福井県, 1969: 15万分の1 福井県地質図幅及び同説明書(塚野善蔵編), 117 p.
- 福井県, 1986: 土地分類基本調査, 今庄・竹波, 44 p.
- 服部 勇, 1979: 内帯古生層地域に分布する緑色岩類中に認められる沸石相および低変成相の広域的分帯の地質学的意義, 岩鉱, 73, 222 - 230。
- 服部 勇, 1985: 福井県下の美濃帯中・古生層中のLength-slow chalcidonyとその地質学的意義, 地質雑, 91 453 - 461。
- 服部 勇, 1987: 福井県南条山地のジュラ紀放散虫について, 福井市郷土科博研報, 33, 29 - 101。
- 服部 勇・服部篤彦・上山康一郎, 1985: 冠山礫岩—美濃帯北西部の中生代礫岩: 福井県下の美濃帯と飛驒帯における中生代礫岩の比較研究, 福井大教育紀要, 2, 35, 33 - 47。
- 服部 勇・吉村美由紀, 1979: 美濃帯北西部南条山地における古生代緑色岩・石灰岩塊を含む地層の産状と分布, 福井大教育紀要, 2, 29, 地学編, 1-16。
- 服部 勇・吉村美由紀, 1982: 福井県南条山地における主要岩相分布と放散虫化

石, 大阪微化石研究会誌, 特別号 5, 103 - 116。

中村和宏・伊藤政昭, 1985: 南条山地芋ヶ平石灰岩の化石相について, 福井市郷
土科博研報, 31, 27 - 34。

中屋義雄・斎藤正直, 1986: 福井県池田町に分布する東俣層について, 福井市郷
土科博研報, 33, 11 - 18。

Ⅲ 土 壤 図

1. 山地および丘陵地の土壌（林地土壌）

(1) 概 説

当図幅内に出現する林地土壌は、乾性褐色森林土壌、褐色森林土壌、乾性ポドゾル化土壌に大別され、これらの土壌母材は、主として中生代の砂岩、頁岩および新生代新第三紀の安山岩であり、乾性ポドゾル化土壌を除き広域に渡り分布している。さらに、中生代のチャート、輝緑凝灰岩を母材とする土壌が帯状あるいはレンズ状に分布し、中世代の石灰岩を母材とした土壌も点在している。これらの土壌の分布状態は、乾性褐色森林土壌は山地の尾根筋や山腹斜面上部にみられ、斜面中腹から下部にかけての山腹には褐色森林土壌が大部分を占めている。また、標高 700 m 以上の山頂、屋根筋、凸形斜面上部には面積的には少ないが乾性ポドゾル化土壌が分布している。これらの土壌は母材、土色、堆積様式、断面形態により表 1 に示すように 1 土壌群、3 土壌統群、13 土壌統に区分された。

表 1 山地および丘陵地の土壌（林地土壌）

土 壌 群	土 壌 統 群	土 壌 統
褐色森林土	乾性褐色森林土壌	今庄 1 統 池の河内 1 統 野坂岳 1 統 杉 箸 1 統 甲楽城 1 統
	褐色森林土壌	今庄 2 統 池の河内 2 統 野坂岳 2 統 杉 箸 2 統 甲楽城 2 統
	乾性ポドゾル化土壌	滝ヶ谷 統 金草岳 統 温 見 統

(2) 各 論

ア. 乾性褐色森林土壌

この土壌統群は、主に尾根筋や山腹斜面上部などの地形的に乾燥しやすい場所に分布しており、比較的酸性が強く養分に乏しい土壌である。形態的な特徴は厚いF層とH層を有する有機物層(Ao層)が発達し、黒色の薄いA層またはHA層が形成されB層との境界は判然としている。物理的にはA層に粒状構造が発達し、B層上部には粒状構造または堅果状構造がみられるのが普通である。菌糸束に富むことはあるが菌糸網層を形成することはほとんどなく、孔隙量が少なく透水性は概して不良である。林野土壌分類のBA、BB型に相当する土壌であり、本図幅では土壌母材の違いにより次の5統に区分された。

(ア) 今庄1統(Ima-1)

中生代の砂岩、頁岩およびこれらの互層を母材とする土壌で、本図幅内には大野市の倉ノ又、熊河(クマノコ)および温見国有林付近を除くほぼ全域の尾根や山腹上部に限られ分布している。面積的に広いため、植生も多種存在するが水分条件が不良なためスギ林はほとんど認められず、大部分はブナ-ミズナラ群落となっている。また、倉ノ又国有林の温見川沿い付近には、中生代の花崗岩(土壤図の ×××× で示す部分)を母材とする土壌および洪積世の礫がち堆積物(土壤図の ○○○○で示す部分)が一部存在しているが、これらの土壌も本統に含めて図示した。

(イ) 池の河内1統(Ike-1)

中生代のチャートを母材とする土壌で、田倉川以南および金草岳北部の山地に帯状あるいはレンズ状に分布しており、植生はコナラ、クリ等の落葉広葉樹が中心となっている。

(ウ) 野坂岳1統(Nos-1)

中生代の輝緑凝灰岩を母材とする土壌で、南条町の奥山国有林から大野市の熊河川に至るまでの山地に帯状、またはレンズ状に分布している。植生は、コナラ群落が中心であるが、標高が高いところはブナやチシマザサなどがみられる。

(エ) 杉箸1統(Sug-1)

中生代の石灰岩を母材とする土壌で、本図幅内ではごく限られたところに点在し

ているにすぎず、分布面積は非常に少ない。

(カ) 甲楽城 1 統 (Kab-1)

新生代新第三紀の安山岩質頁石を母材とする土壤で、大野市の倉の又、熊河、温見国有林に分布しており、植生はブナ、ミズナラなどで下層にはチンマザサがみられる。

イ. 褐色森林土壤

この土壤統群は、山腹斜面中腹から下部にかけて広く分布し、形態的な特徴としては、水湿状態が比較的良好なため有機物の分解が割合速く、従って有機物層 (A₀層のうちF層、H層) は特に発達しない。A層は比較的厚く暗褐色を呈し、上部には団粒状構造が発達し下部には塊状構造がみられる。またB層には弱度の塊状構造のほかは特別の構造はみられない場合が多く、A層からB層への推移は一般に漸移的である。物理的には孔隙量が多く、しかも細粗孔隙のバランスがとれていることが多いので透水性は割合良好である。林野土壤分類のBD、BD(d)型土壤に相当するが、BD型土壤と連続して谷筋に出現する弱湿性および湿性褐色森林土壤 (BE、BF型) は小面積で図示できないためこの土壤統群に含めて表現した。本図幅ではこれら土壤の母材の違いにより次の5統に区分された。

(ク) 今庄 2 統 (Ima-2)

母材は今庄 1 統と同じで、この母材分布地域の斜面中腹から谷筋にかけて出現する匍行および崩積土である。分布面積は極めて多く、水分の豊富な谷筋では湿性のBE、BF型土壤と混在して出現する場合が多い。植生は谷筋などの水分条件の良好なところではスギ林が存在するが、その他は大部分が落葉広葉樹林として放置されている場合が多い。また、今庄 1 統と同様、中世代の花崗岩および洪積世の礫がち堆積物を母材とする土壤も本統に含めて図示した。

(ケ) 池の河内 2 統 (Ike-2)

母材は池の河内 1 統と同一であり、この母材分布地域に出現する匍行および崩積土である。植生はコナラ、クリなどの落葉広葉樹であり、谷筋には一部スギがみられる。

(コ) 野坂岳 2 統 (Nos-2)

母材は野坂岳 1 統と同一であり、この母材分布地域に出現する匍行および崩積

土である。分布面積は極めて少なく、水湿状態の良い場所にはスギが植林されているが、ほとんどは落葉広葉樹が占めている。

(㉔) 杉箸 2 統 (Sug-2)

母材は杉箸 1 統と同じであり、この母材分布地域に出現する匍行および崩積土である。ごく限られた場所に点在しているにすぎず、分布面積は極めてわずかである。

(㉕) 甲楽城 2 統 (Kab-2)

母材は甲楽城 1 統と同じであり、この母材分布地域に出現する匍行および崩積土である。植生は、ほとんどがブナ-ミズナラ群落あるいはチシマザサ-ブナ群団で占められているが、一部スギの人工林もみられる。

ウ. 乾性ポドゾル化土壌

この土壌統群は、特に海拔の高い山頂、尾根筋、凸形斜面の上部など地形的に水が流出しやすい場所に出現し、砂礫を多く含むことが多く、従って孔隙に富むので、透水性が良く排水良好な場合が多い。形態的な特徴としては有機物層(A₀層)が厚く発達し、その中では特にF層の方がH層より厚く発達していることが多い。鈹質土層ではポドゾル化の程度により、灰白色の溶脱層(A₂層)の発達程度は異なるが、いずれの場合も鉄さび色の集積層は割合明瞭に認められる。林野土壌分類のPD I, PD II, PD III型に相当する強酸性土壌であり、本図幅では主に土壌母材の違いにより次の3統に区分された。

(㉖) 滝ヶ谷統 (Tak)

母材は今庄 1 統および今庄 2 統と同じであり、滋賀および岐阜との県境山稜やそこから伸びる尾根筋に分布している。植生は、ブナ、ミズナラであり、これ以外にユズリハやホツツジが目立つのが特徴である。

(㉗) 金草岳統 (Knk)

母材は池の河内 1 統および池の河内 2 統と同じで、主に金草岳山頂付近および若丸山山頂から西に伸びる尾根筋に出現している。植生は金草岳がササ草原であり、その他はチシマザサ-ブナ群団となっている。

(㉘) 温見統 (Nkm)

母材は甲楽城 1 統および甲楽城 2 統と同じで、温見国有林の高海拔地帯の尾根

筋に分布している。代表的植生としてはブナを中心としてユズリハ、アクシバなどが存在している。

注) 統名は「今庄・竹波」図幅のものを一部使用した。

参 考 文 献

- 1) 林野弘済会(1982): 森林土壌の調べ方とその性質(森林土壌研究会編)
- 2) 農林省林業試験場(1975): 林業試験場研究報告第285号(林野土壌の分類)
- 3) 福井県(1969): 15万分の1福井県地質図, 同図幅説明書
- 4) 福井県(1975): 福井県民有林適地適木調査説明書(丹南地区Ⅰ), 付5万分の1土壌図
- 5) 福井県(1976): 福井県民有林適地適木調査説明書(丹南地区Ⅱ), 付5万分の1土壌図
- 6) 福井県(1978): 福井県民有林適地適木調査説明書(奥越地区Ⅰ), 付5万分の1土壌図
- 7) 福井県(1986): 土地分類基本調査(竹波・今庄), 付5万分の1土壌図
- 8) 有光一登(1987): 森林土壌の保水のしくみ(創文)

2. 台地および低地の土壌(農地土壌)

(1) 概 説

当図幅内の農地は、谷底、扇状地に水田が分布し、土壌は沖積世堆積物を母材として生成された灰色低地土壌、グライ土壌からなっている。山麓緩斜面には畑が分布しているが面積は狭少である。

これらの農地土壌は、土色、グライ層の出現位置や斑紋結核、砂礫層の有無母材、堆積様式などの差異によって表2に示すとおり、3土壌群、5土壌統群、5土壌統に区分された。

(2) 各 論

ア. 礫質褐色森林土壌

(ア) 千原統(0623・Chihara)

この土壌は、山麓に分布し、黒褐ないし暗褐色の表層をもち、その下に黄褐色

表 2 台地および低地の土壌の分類基準と土壌統

土壌群	土壌統群	土壌統	土壌番号	土壌統の特徴	母材	堆積式	主な土地利用
褐色森林土	礫質褐色森林土壌	千原統	0623	表層黒褐～灰褐色，下層黄褐色，0～30cm以下礫層，壤質	非固結堆積岩	崩積	畑
灰色低地土	礫質灰色低地土壌 ・ 灰色系	国領統	1312	全層灰色，0～30cm以下礫層，斑紋あり壤質	非固結堆積岩	水積	水田
グライト	細粒強グライイト壌	西山統	1403	ほぼ全層グライイト層30cm以下斑紋なし粘質	非固結堆積岩	水積	水田
	礫質強グライイト壌	竜北統	1413	ほぼ全層グライイト層30cm以下斑紋なし0～30cm以下砂礫層	非固結堆積岩	水積	水田
	中粗粒グライイト壌	上兵庫統	1422	表層灰色，30cm以下グライイト層，斑紋あり壤質	非固結堆積岩	水積	水田

の次表層がある。土性は壤質である。母材は沖積世の崩積堆積物からなり、30cm以浅から礫層を有する。本図幅内では、小倉谷、瀬戸、広野に分布し、畑地として利用されている。

イ．礫質灰色低地土壤，灰色系

(ア) 国領統(1312・Kokuryo)

この土壤は、谷底、扇状地に分布し、ほぼ全層が灰色の土層からなり土性は壤質で30cm以浅から礫層が出現する。母材は沖積世堆積物からなっている。グライ土壤にくらべ一般に地下水位は低く、排水は中程度である。本図幅内では、古木、上温谷、小倉谷、瀬戸、広野に分布し、水田として利用されている。

ウ．細粒強グライ土壤

(ア) 西山統(1403・Nishiyama)

この土壤は、谷底に分布し、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層からなり青灰色を呈している。母材は沖積世堆積物からなり、一般に排水不良で、周年または年間の大部分の期間地下水位が高い強還元性土壤である。土性は粘質である。本図幅内では、小倉谷、杉谷、杣文俣に分布し、水田として利用されている。

エ．礫質強グライ土壤

(ア) 竜北統(1413・Ryuhoku)

この土壤は、谷底地に分布し、全層もしくは作土を除くほぼ全層がグライ層からなり、30cm以浅から礫層が出現する。母材は沖積世堆積物からなっている。地下水位が高く、排水不良の強還元性土壤である。本図幅内では、古木、上温谷、瀬戸、杉谷、杣木俣に分布し、水田として利用されている。

オ．中粗粒グライ土壤

(ア) 上兵庫統(1422・Kamihyogo)

この土壤は、谷底地の平坦面に分布し、表層、次表層は灰色の土層からなり、下層はグライ層からなっている。母材は沖積世堆積物からなり、地下水位は強グライ土壤にくらべて低く、下層まで斑紋の生成が見られる。土性は壤質である。本図幅内では、古木に分布し、水田として利用されている。

参 考 文 献

- 1) 福井県農業試験場（1969）：5万分の1土壤生産性分級図（南越地域）
- 2) 福井県（1978）：地力保全基本調査総合成績書および15万分の1福井県耕地土壤図
- 3) 博友社（1978）：野外研究と土壤図作成のための土壤調査法（土壤調査法編集委員会編）
- 4) 福井県（1979）：福井県地質図幅説明書および15万分の1福井県地質図
- 5) 農林省農業技術研究所化学部土壤第3科（1983）：農地土壤の分類，土壤統の設定基準および土壤統一覧第2次改訂版
- 6) 博友社（1984）：土壤調査ハンドブック（ペドロジスト懇談会編）
- 7) 今庄町・今庄町土づくりセンター（1985）：今庄町の土づくり，土壤診断と対策

（福井県農業試験場 野村豪一）

Ⅳ 土地利用現況図

1. 概 説

本地域は、山地が98%を占め、低地が2%の構成となっている。山地は、森林に利用され、低地は、水田、畑に利用されているが、水田、畑の面積は狭小である。

また、足羽川、日野川が、岐阜県境で源を發し流れている。

2. 各 論

(1) 農 地

本地域は、山地が大部分を占め、農地は谷底に水田、山麓斜面に畑がわずかにみられるだけである。

農地は主に湿田であり、稲作がおこなわれている。

(2) 林 地

本地域は、大部分を天然の広葉樹林が覆っている。

冠山の附近では、日本海型のブナ林相が構成されている。夜叉ヶ池周辺の標高800 m附近では、ブナ原生林の下部林帯として、ブナーミズナラ林帯が分布する。また、1,000 m附ではタテヤマリンドウ、ミヤマトウキなど区系地理学的に重要な種類が多く分布している。

この地域は、人工林率が低く、県内でも遅れている地域である。

(3) 村 落

この地域は、地形的には恵まれているとはいえ、村落も少ない。南条町の田倉川周辺、池田町の足羽川周辺に点在しているだけで、山地が大部分を占めている。

昭和 63 年 3 月 印刷発行

土 地 分 類 基 本 調 査

冠 山 ・ 横 山

編 集 発 行 福 井 県 県 民 生 活 部 地 域 振 興 課
福 井 市 大 手 3 - 17 - 1
電 話 (0776) 21-1111

印 刷 緑 川 地 図 印 刷 株 式 会 社
東 京 都 墨 田 区 吾 妻 橋 2-18-3